

## 新たに史跡となる二つの古代「官衙遺跡群」

下寺尾七堂伽藍跡等調査検討委員会 荒井 秀規

平成26年(2014)11月21日に、東京湾要塞跡(横須賀市)とともに下寺尾官衙遺跡群(茅ヶ崎市)と橘樹官衙遺跡群(川崎市)の二つの古代遺跡が、国の文化審議会から、新たに国史跡に指定するよう文部科学大臣に答申された。来る官報告示を待って、神奈川県の国史跡は58件となる。

下寺尾官衙遺跡群の指定には、微力ながらお手伝いすることも出来たので、まずはこの二つの官衙遺跡群の史跡指定を喜ぶたい。

さて、問題は、指定後である。

昭和49年(1974)に国の史跡に指定された勝坂遺跡(相模原市)を、はじめて訪れたのは昭和60年(1985)のことであった。勝坂式土器の名とともに縄文時代中期の大集落跡と期待したが、現地には一部壊れた説明板があるだけで、ただ人気のない草地が広がっていたと記憶している。その印象が強かったせいか、以後立ち寄ることはなかったが、平成23年(2011)夏に近くの石楯尾神社(式内論社)へ行く機会があったので、四半世紀を経て再訪し、その様変わりに驚いた。

平成21年(2009)度に遺跡公園として整備され、土葺きと笹葺きの竪穴住居が各1棟と竪穴住居廃絶後の窪地が復元されているほか、敷石住居のレプリカが屋外展示され、要所々々にはカラー写真や遺構図を掲げた説明板が立てられていた。また、管理棟があり、出土品も展示されていた。草むしりする人、行き交う親子連れもいて、かつてを知るだけに、非常に感銘を受けた再訪であった。

史跡指定は、「保存・継承」もさることながら、それも含めて将来の「公開」、「活用」のための指

定でなければ意味はない。「活用」されぬ史跡、市民に知られざる史跡は、そこにはないのと同じである。その点でも、今日の勝坂遺跡は、周辺の地形を利用して「大自然の中の縄文時代」として整備され、「縄文まつり」ほか、体験教室「縄文服作り」、講演会など各種行事が毎月のように行われている。その行事の実施は、相模原市文化財保護課のほか、勝坂遺跡活用実行委員会、土器づくりの会などの民間団体である。相模原市は、平成11年(1999)に国の史跡となった田名向原遺跡でも同様に整備、遺跡公園化、そして平成21年(2009)には「旧石器ハテナ館」をオープンさせて、その積極的な「活用」がなされている様子は、同市のホームページに詳しい。

今回、新たに史跡となる二つの官衙遺跡群でも「公開」、「活用」が予定されているが、ともに「整備」以前の段階であり、相模原市の2遺跡がそうであったように時間が必要となる。市内はともかく市外への周知はまだこれからである。今回の指定を起爆剤として、両遺跡の内容と重要性を広く市民に認識してもらうことが重要で、今年は茅ヶ崎・川崎両市で関連イベントが予定されているが、本会の講座「相模の国を創る～古代の役所と寺院～」(2月22日)もその一助となろう。

「官衙遺跡群」とあるのは郡家のほか「郡寺」を含むからで、先行の指定は弥勒寺官衙遺跡群(岐阜県)、台渡里官衙遺跡群(茨城県)など7例ある。「郡寺」の意義、「活用」の仕方など、計9件となる「官衙遺跡群」が一堂に会した、全国的視点による企画を神奈川県で行うことは出来まいか。

## セピア考古学雑記

神奈川の考古学を黎明期から支えてこられた先達にスポットをあてた考古学雑記。第5回目となる今回は、神奈川県教育委員会で主に埋蔵文化財保護に尽力されてきた小川裕之さんからお話を伺いました。

—よろしく願いいたします。

▼考古学を目指したきっかけ—赤星先生との出会い—

横須賀高校の頃、学校の裏山を造成してグラウンドを造る工事を自衛隊がやっていたんだよ。そのときに竪穴住居址が出て、赤星（直忠）先生が見ることになった。それを見てこれはおもしろいな、と。きっかけはそれじゃないかな。先生をその時に初めて知って、何かの拍子に先生のところへ行っただよね。先生のお宅は学校のそばだから。それから家にお邪魔するようになった。それで大学はどこへ行こうかという話になったときに、赤星先生がそのころ大場（磐雄）先生と昵懇<sup>じっこん</sup>だったから大場さんのいる國學院大学がいいんじゃないのかと勧めてくれた。

▼ほうぼうの現場へ

赤星先生は、とにかくなんでも経験したほうがいい、携わったほうがいいという主義。聞けば教えてくれるけど、自分から率先して教えるということはなかった。それで、大学の研究室にはほとんど行かずに、先生の調査について行っていた。そのころは三浦半島もそうだけど、県の直営であちこち掘っていたんだよね。いわゆる学術調査。それで、伊勢原の登尾山古墳<sup>とおのやま</sup>とか尾根山古墳、あとは大山山頂の経塚とか。あれは県の総合調査だったんだよね。ほとんど赤星先生の調査と三浦半島の調査とそういう県の調査。

▼印象に残っている遺跡はありますか？

大山のてっぺんは一週間泊まったんだよね。（阿夫利神社の）上社に泊まったの。経塚は赤星先生、縄文は岡本（勇）さんが掘って、三上（次男）先生は東洋陶磁だから登って来ない（笑）。あとはいま青山大学にいる田村（晃一名誉教授:2014年12月逝去）さんから東大の学生4.5人が登っただけだったかな。機材を担いで、下から歩いた。食料は強力<sup>ごうりき</sup>が上げてくれた。

真夏だったから風呂も強力がドラム缶担ぎ上げてくれてね、水も下の方の沢から背負子で。そういう点ではいい調査だったね。そのとき、田村さんが山のとっぺんで風邪をひいてね、それで煤ヶ谷の下にある県の診療所まで抗生物質をもらいに行こうとダーっと降りて登って、夜中に診療所をたたき起こしたんだ。強力がびっくりしてたよ。



▼ほかに赤星先生の門を叩くような人は？

あのころは赤星先生が横須賀考古学会を作っていたんだよ。そこには、川上（久夫）さんがいて、神沢（勇一）さんがいて岡本さんがいるでしょ。年中行っていたのは、岡本さん、神沢さん俺と斉藤（彦司）君とあと何人か。写真を撮ってる中島さん、あと明治大学に行っている橋本（良雄）君と鉤持（輝久）君とか。入るきっかけは、やはり一番大きいのは赤星先生の影響だね。—そのように影響を受けて小川さんもコレクションをお持ちで？

ない。一切俺は持ってこない。赤星先生も自分は持ってこないだと言ってるんだけど、工事現場で拾ってくるんだよね。見つけては持ってくる。そういうふうには持ってくると家が「遺跡」になっちゃう。ただ、一点だけ静岡の志戸呂の古い窯のものがうちにある。窯での焼きそこない。お茶畑にある窯の下に川が流れていて、行くとゴロゴロと落ちているんだよ。だから、それを拾ってきた。あそこは、中世があって近世があるし現代の窯もあるんだよ。もうひとつの中世の窯の上には墓石が立っている。近世のはでかい谷底に上の方から下まで灰原がぶわーっと。あれはおもしろい。

▼大学の卒業論文は、なぜ宝篋印塔<sup>ほうきやういんとう</sup>にしたんですか？

赤星先生だよ。宝篋印塔はでかいから（他の人は）やらない。もう一人やっている人がいたから俺もやる

うかなくて。形態変化が追っかけられるだろうと思って一番楽なのを選んだ（笑）。大場さんは何も言わなかった。いいよ、なんて感じですんなり通してくれたよ。赤星先生に見てもらってますって言ったら、ああそうかなんて。

#### ▼短い教員生活、そして…

最初は、学校に勤めたんだよ。親父が教員だったから教員にでもなろうかなと考えていた。ただ親父は理系で、兄弟3人のうち下2人も理系なんだよ。だから、親父に文系はお前だけだなんてよく言われた。

小さな学校で、一学年一クラスなんだよ。勤めたとたん主任なんだよね（笑）。それで、2学期までやったら県に来ないかと言われて。その時、県には神沢さんがいたけど、博物館準備室ができるからってそっちに行っちゃった。それで県に来ないかということになった。昭和39年の1月1日、元旦付けの辞令だったな。赤星先生は一切人事ってものは嫌いだから、その話は教育委員会から来たんだ。さんざん迷ったんだけど、面白そうだから行くなかって。でも行ったら大変で、教員やってた方がよかったよ（笑）。

#### ▼押し寄せる開発の波と文化財保護

神沢さんと事務手続きをして1週間と経たないうちに第三京浜で建設が始まるからって予算を決めたんだよ。そうしたら神沢さんが、「俺はもう博物館で現場に出られないからお前行って全部やれ」と。でも、1週間後に文化庁から齋藤忠さんが現場を見に来ることになって、そのときは何もわからないから神沢さんが一緒についてくれた。それが大雪の日で、一面真っ白な地面を指しながら神沢さんが「ここが遺跡です、このあたりです」と（笑）。それで次は自分で調整する段取りとなったけど、雪の時に行ったからどこかわからない。

—その頃は高度経済成長期で…

そうそう。県内を通ってる高速道路は全部手掛けたんだよ。第三京浜、東名、小田原厚木、中央道。そのころは地主交渉も自分でやるんだよ。だから大変なんだ。分布調査だって、計画段階だから道路幅だけじゃなくて100m幅でやるんだよ。まだ山林ばかりで、それをひとりでトコトコただひたすら歩くんだよ。東名は全線歩いてる。中央道も山の中を歩いた。小田原

厚木道路も大磯なんか一旦一つの山を見るとぐるっと遠回りして目的のところに行かなくちゃならない。横穴墓も探した。

そのころ県内の遺跡は遺跡台帳に350くらいしかなかったんだから。それで新しい遺跡を見つけると地主交渉をして、それから掘る人を探さなくちゃならない。六大学全部に頼みに行ったよ。それで調査団を作って夏休みにやるんだよね、みんな普段は授業があるから。

#### ▼折衝と調整と—

—発掘調査の費用は開発側の負担に？

そう。そのころからね。その代り整理費がゼロだから掘るだけ。慶應の江坂（輝弥）さんとか早稲田の桜井（清彦）さん、菊池（徹夫）さん、駒沢の倉田（芳郎）さん、立正の坂詰（秀一）さん、国士館の大川（清）さん…そうそうたる人たちに頼んだ。旅館を手配して全部お膳立てしてできましたって先生に言うて来てくれるわけ。だから全部裏方をやるんだよ。東名の下原遺跡（川崎市）の時なんかね、掘りだしたらあんなにすごくいい遺跡でしょ。和島（誠一）さんから現場で一時間ぐらい昏々とお説教くらったり（笑）。よく言えばマネージメントなんだけど、昔の言葉で言えば手配師だよ。ただ、そのおかげでいろいろな先生を知ってるわけだよ。みんなよくやってくれて、それはありがたいよね。まあ和島さんだけだよ、あんな現場の寒い中で遺跡論ふっかけてくるのは。一時間も二時間も立ったままで…。あの先生独自の遺跡論だよ（笑）。あれはいい勉強になったけど苦痛だった。次の仕事があるのに帰してくれないんだもん。でもいい思い出だよ。

そのかわり、家庭は犠牲だよ。このごろ孫を可愛がっていると息子が来て、俺のときはそんなにしてもらえなかったって言うんだよ。そりゃあそうだよ、土日になると赤星先生のところで掘って、普段から毎晩帰りが遅い。夏休みは、大学が調査やってるでしょ。リュックに着替えを詰めて一緒に掘る。終わると家に帰ってきて、翌日になるとまた別の大学がほかの現場にくるから家に帰ってまたリュックの中を詰め替えて行くわけ。だから家にもいないんだよ（笑）。県庁にも行かなかったけど、よく許してくれたなあ。



### ▼神奈川県埋蔵文化財センターの立ち上げ

県にいたるときは教育委員会の仕事をしながら、職員の採用もしなければならぬ。センターを作ろうって働きかけてから随分かかったよ。5年じゃ効かない。仕事のあとで白石（浩之）君、山本（輝久）君、岡本（孝之）君たちと部屋のレイアウトとかを相談しながら全部図面を引いた。そうしたら、当時の長洲知事が文化財のシンボルを建物の中に作れというので、設計屋と相談しながらじゃあ円筒埴輪で行くかということにして正面にドームが二つできたんだ。それで通路を作って両側にガラスケースをおいた。

—あれはそんな意味があったんですか。

### ▼センター課長としての仕事とは

人事関係だよ。あとは調査の進捗状況の管理。県や道路公団から予算を取ってくる。切った張ったの世界だから大変なんだ。でも、職員はよく掘ってくれたよね。その中から最初に大学教員になったのが鈴木保彦（日本大学）で、それから岡本孝之（慶応義塾）。白石君が愛知学院大、山本君が昭和女子大と4人出ているんだよ。15、6人採用したうちの4人だからね。みんなよく勉強してくれたと思うよ。これを「自分の研究ばかりやっていたからだ」って皮肉を言う人もいる。でも、そうじゃなくてみんな調査をしながらそれぞれ頑張って問題提起をして研究していたんだからいいじゃないですか。神奈川県でよくこれだけ出したねって言うってくれる人もいる。

県の埋蔵文化財センターを作ったころ、財団など法人のセンターはもう全国組織があったけど、公立のセンターにはそういう組織がなかったから、じゃあ法人と対抗するために作ろうと秋田や福岡など全国の知り合いに声をかけて全国組織を作ったんだよ。

それと、当時は県内の市町村に埋蔵文化財ができる人がいなかったから、市町村の上の方に会いに行って「職員を採ってください」と頼むわけ。そういう事も全部やっていたの。人が採用されると今度は相談に乗ったりして、それが終われば一杯飲もうよってなる。だから家に帰るのはだいたい終電になっちゃう。

そのおかげで各地のいろいろな遺跡を見ることができた。そういうときは、赤星先生に「いろいろな遺跡見ろよ」って言われていたので助かってるんだよね。行政に入れば、縄文とか旧石器だけじゃないでしょ。

だから、そこは県に行ったときから助かっている。

市町村からの相談にも乗れるからね。保存運動が起きた時にはどうすればいいとか、ある程度わかっているから教えられる。お陰様で、市町村の職員もみんな知ってくれている。もう定年でやめていたりしているけどね。市町村の人もみんな苦労してるんだよ。小田原城とか大和市のつきみ野遺跡なんかも、みんな頑張ってくれてたから。それには、こっちも応えないとだめだからね。

—保存運動については、何かきっかけがあったんですか？

開発に追われてると壊すばかりで、それじゃあ寂しい侘しいじゃない。岡本勇さんと江田の住宅公園の調査をやっている時に掘り切れなくて終わらないの。（陽が落ちてても）一生懸命掘っていて、俺も行って車のヘッドライトをつけてまでやったけど最後に一升瓶の酒を撒いて、じゃあこれで終わりにしようっていうことがあった。それで、なんとか遺跡を残さなければならぬ、まず最初は自分の退職金分くらいは遺跡を残したいと思って頑張ったわけ。でも、それ以上残せたかいいなと思っているんだけどね。どんどん残せるところを残していければと思う。

小田原厚木道路のときの五領ヶ台貝塚は、道路の設計変更で貝塚を残して国指定史跡にした。平塚市の方が頑張って公園にしたでしょう。あれは史跡なんだけど都市計画法の都市公園にした。それで早く整備できて、東西両側の貝塚だけは残したわけ。

一番でかいのは北条政村邸跡だよ。あれは、まっちゃん（松尾宣方）と大三輪（龍彦）君があれだけの面積を残した。

あとは川崎の東高根遺跡だな。今は県立公園になっているけど、もとは県の住宅公社の事業地で、はじめに試掘坑を何箇所か掘ったけど、これは三殿台遺跡クラスの集落だって言ったの。用地の斜面にはモミの原生林もあって、上は大集落、斜面は緑地、下は谷戸型の弥生時代水田だから全部が保存対象と言ったら開発をあきらめたんだ。今はいい公園になってるよね。そうしたこと、たまにはないと、もう年中苦虫つぶして問題処理ばかりじゃあ、嫌になっちゃうもん。

史跡指定は、きちんと掘ってデータ出していかなくちゃいけない。多い時にはいっぺんに30くらいも抱えるんだよ。それを同時並行でこなしていけないと

いけないから。

—全部携わった遺跡を覚えておられるのですか。

どんどん忘れるようにしている。忘れていかないと頭が混線していくから。ただ、残しても整備が追い付かないのが悔やまれるんだよね。相模国分寺も掘ったけど、あれは俺が県に入って二年目かな。賄いのおばさん探したり、完全にもう設営にかかりきりだった。

#### ▼これからの埋蔵文化財行政に求められていること

市町村の文化財の部署では、埋蔵文化財だけではなく、民俗芸能無形文化財とか社会教育もやりながら調査もやらなければならない。だから、採用する側も入る人もそういう覚悟がないとだめだろうね。以前はそうしたことをある程度理解してくれる市町村が多かったし、埋文センターに行ってからそういう流れは残していたから、あちこちで採用してくれていたけれど、今はどこも人員削減と予算もないというところでちょっと大変じゃないかな。どうやっていくかが難しいところ。世代交代の中でそれまでやってきたことを引き継いでいかないといけない。でも、採ってる市町村は取ってるから、格差は出てくる。

県や市町村は、自分が掘るより（発掘調査の計画から調査の成果までを）チェックする機能を重視したほうがいいと思う。これが行政の本来の姿だと思うんだよ。そうしないと自ら掘っていたら大変だし、今は民間調査会社がたくさんあるから、そういうところに調査を依頼したっていいと思う。そうして掘った結果がいいのか悪いのかをチェックしてデータも管理する。それには入った職員が勉強しないとダメ。もっと行政は本来何をするべきかって。そうして、時代に対応して変化していかなきゃいけないんじゃないかな。

それに、俺なんか開発の事業主からスコップ持って追いかけられたこともある。本当なんだよ。それぐらいやり合う。そのかわり分かれると意気投合するわけよ。そういう覇気がないと職員もダメだと思うね。

#### ▼神奈川県考古学会のこと

神奈川県考古学会は、それまで遺跡発表会だけで、その母体があやふやだったから川崎の村田文夫さんと白石君とかが中心になって作ったわけ。俺は、会員には、ある程度考古学の専門研究をしてる人から初心者的な人までに3層あると思ってるんだ。それで、以

前はもっと啓発のやさしい入門講座をやらなきゃダメだと思ってやっていた。それが今は、「学会」と名がつくものだから研究者寄りでやってない。会としては、初心に帰って啓発をやらないとダメ。それと最近は機関誌も出ていない。遅れてるでしょう？担当する人も大変だと思うけれど、きちっと出してくれないと。

あともうひとつ、これ（当インタビューのタイトル）は、セピア色って言うと亡くなった人を偲んでやるようなイメージに近いじゃない（笑）。それじゃあ、これからみんなあまり引き受けたがらないよ。

#### ▼これから考古学をやっていく人たちへ

いま考古学は、専門化しすぎて、研究していくのが難しいんじゃないのかな。中世が好きで今まで関心をもって眺めてきたけれど、中世の土器なんて細かすぎちゃって・・・それはどの時代もそうなんだよね。縄文でも弥生でも古墳でも、森を見ないで木ばかりを見ている。報告書も多いから読みこなすのも大変だよな。

鎌倉にはやぐらがいっぱいあるし三浦半島にもあるけど、俺は（持論として）江戸まではあると思うんだ。どのようなテーマでもいいから好奇心を持って見てもらえれば見方が変わるんだよね。今、俺は横須賀考古学会で近代部会にいるんだけど、好奇心持って見ると何気なく見逃していたものが見えるようになるんだよね。「水道みち」なんか（愛川町の）半原から3回か4回歩いてる。1回歩いただけでは見落としているところもわかるし、それを今100枚くらいの原稿にまとめるんだけど、まとめるとなるとさらに見方が違ってくるでしょう。関心を持っていると、見る目が違って来る。だから、そういう姿勢を持ってもらえるとありがたいなあ。

—今日はありがとうございました。

私も記憶があまり定かじゃないからね（笑）。お役にたてたかどうかわからないけど。

普段はあまりご自身のお話をされない小川裕之さんの孤軍奮闘されてきた貴重な逸話の大部分は残念ながら紙幅その他の事情でこの場にはご紹介できませんが、その一端を活字にまとめました。小川さんの業績、指定に携わってこられた史跡の詳細等は、神奈川県考古学会から先に刊行された『神奈川考古』第30集をぜひご覧ください。

## 赤星直忠博士文化資料館の紹介

剣持 輝久

神奈川県の考古学だけではなく、日本の考古学に大きな足跡を残された、赤星直忠博士が亡くなられてから今年で24年になる。

赤星博士が大正の終わり頃より、調査研究で得た膨大な遺物、「赤星ノート」と呼ばれている記録類、および図書の多くは、神奈川県立歴史博物館、横須賀市自然・人文博物館、神奈川県埋蔵文化財センターに、博士が生前寄贈されている。

博士が最後まで所蔵されていた遺物や、「赤星ノート」のうち海蝕洞穴遺跡・城郭関係など、少なからぬ資料が、博士が亡くなられて間もない1991(平成3)年の春、「皆さんで研究に役立たせて下さい。」と、ご遺族より寄贈の申し出があり、横須賀考古学会会員の宇内城一氏の宇内建設本社ビルに運ばれ、現在、当館で所蔵されている。

寄贈された資料は、散逸されることなく管理し、研究者および一般市民に公開するため、横須賀考古学会の会員であった故塚田明治氏を中心に整理・展示作業が行われた。こうして2005(平成7)年に、宇内氏の好意により、宇内建設本社ビル3階に、赤星直忠博士文化財資料館が開館した。

赤星博士は、学校の教師・陸軍の軍人・鉄道車両会社の社員の傍ら、考古学の調査研究を続け、特に縄文時代の土器編年、弥生時代の海蝕洞穴遺跡、古墳時代の横穴の編年、平安時代から第2次世界大戦までの城郭の研究に力を注がれている。その著作は500にも及ぶ。

しかし、活字化されたものも多いが、学位論文の「横穴古墳の編年研究」や、戦時中に金属回収で供出された

寺院の釣鐘の記録等、未発表の論文や記録、未発表の遺物が寄贈された資料のなかに少なからずあった。このため、これらを「資料館だより」1～13号、「資料館叢書」1～3というかたちで刊行してきた。

現在、当館として大正11年～昭和20

年までの「赤星ノート」で、鳥ヶ崎横穴や田戸遺跡、鎌倉の瓦等、日々の調査を記録した「考古学研究資料」の復刻準備を進めている。

展示室には、江戸坂貝塚、雨崎洞穴、猿島洞穴、鳥ヶ崎横穴、公郷瓦窯跡、永福寺跡を含めて132遺跡の遺物が展示されている。

当館は、今年で開館20年になる。これからも赤星資料の管理・調査研究とともに、研究者だけでなく、小・中学生を含めた市民への公開活用に、務めていきたいと考えている。

開館日時：宇内建設の営業時間なら見学可能。

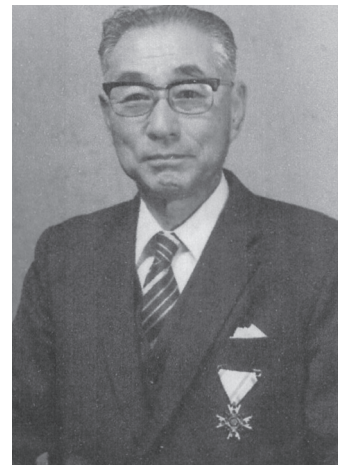
※水曜日の13-16時は研究員がいるので見学者の対応可能。

所在地：横須賀市長坂2-8-12 宇内建設ビル3階

電話：046(857)7626

交通：JR横須賀線「逗子」駅・京浜急行「新逗子」駅から京浜急行バスで「佐島入口」停留所下車、徒歩2分

ホームページ：<http://unai-kensetsu.e-yokosuka.jp/contents1.htm>



### 2014年度 第3回見学会のお知らせ

日時 2015年3月21日(土) 10:00～16:00 頃

内容 神奈川県考古学会 考古学講座 2014 関連イベント

『古代高座郡関連の遺跡めぐり』茅ヶ崎市 下寺尾官衙遺跡群をさぐるー

集合場所 JR 茅ヶ崎駅 改札前 会の旗が目印

集合時間 10:00(小雨決行) 事前申し込み不要

近年の調査の成果が著しい茅ヶ崎北郊の高座郡関連遺跡群を詳しく学ぶチャンスです。

2月開催の考古学講座関連イベントとして遺跡現地を訪ねます。

詳細は、追ってお葉書でお知らせいたします！みなさまふるってご参加ください。



平成 26 年度第 2 回見学会参加記

かながわの遺跡展「発掘された御仏と  
仏具 ―神奈川の古代・中世の仏教信仰―  
見学記

須田 英一

2015 年 1 月 11 日（日）、神奈川県立歴史博物館において開催されている「かながわの遺跡展 発掘された御仏と仏具―神奈川の古代・中世の仏教信仰―」の見学会に参加しました。

見学に入る前には、会議室において展示担当の神奈川県教育委員会の富永樹之氏による解説がありました。入門講義という形で、「神奈川県の古代寺院と村落内の仏堂」に関するリーフレットが配布され、富永氏のユーモアセンスあふれる解説もあり、28 名の参加者も楽しく聞き入っていました。図録も全カラーで、30 ページ立てで立派なものです。

事前に知識を得てから、実際の展示解説に入りました。エントランスでは経塚の資料群が私たちを迎えてくれました。展示の中で私が印象に残ったのは、郡家隣接寺院である茅ヶ崎市の下寺尾廃寺の出土資料でした。スペースをさいて様々な仏具が展示されており、内容の豊富さには目を奪われました。郡家は県立茅ヶ崎北陵高校のある台地上にあります。この遺跡の保存問題に関しては皆さんも記憶に留めていることと思います。下寺尾廃寺は郡家南側の微高地にあり、近年の発掘調査により多くの成果があり、伽藍配置の全貌が明らかになるのもそう遠く



写真 1：展示担当の富永氏による説明に聴きいる参加者



写真 2：展示兼学の事前に別室にて行われた講義の様子  
ないことと考えられています。

昨年 11 月には、この「下寺尾官衙遺跡群」と、川崎市の「橘樹官衙遺跡群」が国の文化審議会により国の史跡に指定するよう答申されました。前者は古代相模国高座郡の役所と下寺尾廃寺など、後者は古代武蔵国橘樹郡の役所と影向寺で構成されています。

そして、本年 2 月には本考古学会主催により、古代寺院に関する考古学講座の開催が茅ヶ崎市で予定されています。そういった意味で今回のこの展示と講座は、今年度中には行われるであろうこれらの官報告示を祝うイベントでもあるように思えてきます。

また、神奈川県には乗越瓦窯跡と宗元寺・御浦郡衙、相模国府、相模国分寺、からさわ瓦窯跡と千代寺院跡・足柄郡衙などなど、古代相模国に関わる研究素材が目白押しです。ますます研究が活況を呈していくことを熱望しています。

この遺跡展は、茅ヶ崎市の文化資料館での巡回展が引き続き予定されています。今後は行政（県・市町村）・博物館・考古学会などが官・民で連携して、一つのテーマに対して取り組むことが、県内の考古学を盛り上げるためにも必要となってきます。そういった意味でも、今回の遺跡展は実にタイムリーな企画だったと思うのは私だけではないでしょう。

## 神奈川県考古学会 次期(2015-2016年度)役員公募のお知らせ

神奈川県考古学会は、会長・副会長のもと、2年間で1期として自薦または現役員からの推薦を受けて選出された役員を構成員とする役員会により運営されています。役員会は、総務・発表会・連絡誌・会誌・見学会・講座の各担当に分かれて、県考古学会が主催する各催しの実施、刊行物の編集・発行等を行っています。

今回、より広く会の活動を会員のみなさまに知っていただく意味も込めて、初の試みとして次期役員改選に合わせた役員の公募を行うことになりました。つきましては、公募に先立ち、各担当の活動について説明会を実施いたします。会の趣旨にご賛同くださり、当会の運営に携わりたいとお考えの方、また、催しものの開催時のお手伝い等にご興味のある方は、ぜひこの機会に説明会にご参加ください。

説明会日時：2015年3月8日(水) 19:00～

説明会受付：下記アドレス宛に必要な事項を明記のうえ、2月末までに送信してください。

宛 先：soumu@koukokanagawa.com

必要事項：① 申込者の氏名(ふりがな)

件 名：活動説明会参加申込

② 返信用メールアドレス

※ 切：2015年2月末日送信分まで

③ 興味のある活動

※ 役員間の連絡は主にメールを使用します。添付ファイル等もありますので、モバイル通信機器のみのアドレスは不可とします。

※ その他ご質問事項、アピールポイント等がありましたらあわせてご記入ください。

### 総務担当：

主に、会計事務、会議開催、出版物の管理・販売を担当します。

具体的には、会計事務として、会費や出版物の収入と各事業での支出の管理、会議開催として、総会の会場運営と年6回奇数月に行われる役員会と各担当の進行確認を行う幹事会の運営事務、会議録の作成、また、出版物の在庫管理と販売事務を行っています。

### 発表会担当：

年1回秋に行う遺跡調査研究発表会の準備を担当します。主な作業内容は以下の通りです。(1)発表遺跡の検討と確定 (2)会場の手配(3)共催・後援の申請と報告 (4)発表者への発表要旨原稿作成と当日発表の依頼 (5)発表要旨の編集 (6)発表要旨の印刷・製本の業者への依頼 (7)チラシのデザインと印刷 (8)会員・関係団体・施設へのチラシの送付 (9)図書交換会参加者の募集と確定 (10)当日参加者数の検討 (11)当日のタイムテーブルと作業の割り振りの作成 (12)横断幕の作成 (13)発表者のお弁当・飲み物の手配 (14)会場の準備・設営 (15)当日の進行 (16)会場の撤去 (17)懇親会の会場決定と参加人数の確定とその幹事

### 連絡誌担当：

秋冬の年2回、会員向けの回覧板としてリーフレット形式の小冊子を発行し、神奈川県考古学会総会、見学会、発表会、講座などの活動内容の紹介と報告を行っています。その他、神奈川県内の遺跡や遺物紹介や考古学を学ぶ足がかりとなるようなコラムを不定期で掲載しています。2007年度以降は、インターネットの普及に即して当会ホームページ「Web版考古かながわ」を開設し、随時情報提供ができる会員ネットワークの構築と活用の方角性を模索しています。

### 会誌担当：

活動内容は、年に一回、会誌『考古論叢神奈河』を刊行することです。具体的な作業は、論文執筆者から提出された現行の編集作業と校正原稿のやり取り、印刷業者の選定、刊行後の会誌の発送です。

### 見学会担当：

年に3回、博物館の展示、遺跡の現地説明会などの見学を企画・実施し、会員の皆様に生の遺跡・遺物に触れていただく機会を提供しています。平成25年度は江戸東京博物館で開催された「発掘された日本列島2013」展、

小田原城御用米曲輪の現地説明会、神奈川県立博物館で開催された「かながわの遺跡展」を見学しました。

### 講座担当：

講座部会は、考古学の普及・啓蒙の一つとして行われる事業で、活動内容は、会員からの「これが知りたい」という要望や担当者の「これを知っていて欲しい」というワガママについてテーマを決めて、わかりやすく学ぶ機会をつくることを目的としています。具体的な活動内容は、①テーマを決める。(何をやるのか)、②講師を決める(誰に話していただくのか)、③講師の承諾をいただく(熱意)、④会場確保(出来るだけ安く)、⑤講師の方への依頼文作成及び送付(ほぼ定番化している)、⑥チラシ・ポスターの作成(センスが光るところ)、⑦原稿集約及び編集(ちょっと編集者気分)、⑧印刷依頼(完成本が楽しみ)、⑨講座当日(頑張ってきたことの集大成がみえる)となっています。①テーマを決める②講師を決める③講師の承諾をいただくまでが大きな役割であり、部会の醍醐味があるところです。

### 編集後記

2014年度第2号となる第53号をお届けいたします。今号は、史跡に指定された神奈川の古代官衙遺跡とその保存活用についての展望を荒井秀規さんに巻頭言として寄稿していただきました。また、考古学雑記では、神奈川の文化財行政の礎造りに尽力されてきた小川裕之さんにお話を伺いました。

### 考古かながわ 第53号

発行 神奈川県考古学会  
発行日 2015年2月20日  
編集 連絡誌部会：桑原・高橋・古田士  
印刷 (有)湘南グッド  
発行者 神奈川県考古学会 会長 岡本孝之  
郵便振替 00240-9-71208  
E-mail soumu@koukokanagawa.com  
URL http://www.koukokanagawa.com